

与印東三郎左衛門祐信女房 1231p

によん

器もの

によん

番

舟

楫

によん

夫

盗

によん

によん

つがはさる 女人はふねのごとし かぢのまかするによるべし、しかるに
女人はをとこぬす人なれば 女人ぬす人となるをとこ主なれば 女人

后

ぜんにん

によん

こんじょう

きさきとなるをとこ善人なれば 女人 仏になる、今生のみならず

左衛門殿

ほけきよう

後生もをとこによるなり、しかるに兵衛のさゑもんどの法華經の

ぎようじや

妻

ほけきよう

行者なり、たとひいかなる事ありともをとこのめなれば 法華經の

によん

心

発

女人とこそ仏はしろしめされて供らんに又我とこころををこして

ほけきよう

帷

贈

法華經の御ために御かたびらをくりたびて侯。

ほけきよう

ぎようじや

しうにん

剥

もんじ

ばんぶ

法華經の行者に一人あり 聖人は皮をはいで文字をうつす 凡夫は

領

ほけきよう

ぎようじや

くよう

ただひとつきて候かたびらなどを法華經の行者に供養すれば皮

一

ほけきよう

ばんぶ

をはぐうちに仏をさめさせ給^収つなり、此の人のかたびらは法華經の六
万九千三百八十四の文字の仏にまいらせさせ給^{たま}いぬれば、六万九千三
百人十四のかたびらなり、又六万九千三百八十四の仏・一・六万九
千三百八十四の文字なれば此のかたびらも又かくのごとし、たとへば
春^{はる}の野の千里ばかりにくさのみちて候^{そつち}はんにすこしの豆ばかりの
火をくさひとつにはなちたれば一時に無量無辺の火となる、此のか
たびらも又かくのごとし、ひとつのかたびらなれども法華經の一切の
文字の仏にたてまつるべし。
この功德は父母^{くどくふも} 祖父母^{そふも} 乃至無辺の衆生^{ないしむへんしゅじやう}にもをよぼしてん、まして
わがいとを^{最愛}しとを^{もふ}をとこは申^{もつ}すに及^{およ}ばずと、おぼしめすべ
し、おぼしめすべし。

五月二十五日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

さじき女房御返事にようぼうごへんじ

解説)さじき女房とは

六老僧日昭の兄、印東次郎左衛門尉祐信の妻で、印東祐信の父を祐照、その妻の妙一尼をさじきの尼、嫁をさじき女房と称したと言われている。昔、印東氏が源頼朝の由比ヶ浜遠望のために山上に棧敷を構えた後に、居を構え住したことになるもので、地名に由来したもの

● 女人の境界は連れ添う夫によって定まることを教示

女性は求(ぐ)道(どう)心(こころ)を害する、見た目は菩薩だけれども内心は夜(や)叉(また)しゃであるなどと言われ、その性質も三毒強盛にして川のごとく曲がった心、曲がれ木の如しなどとされ、永く成仏できない者として嫌われ、やっと法華経で成仏を説かれた

当二世に亘って夫婦一体であるとの教えから、善人の夫に従う女人が現当

に亘る成仏を遂げることが説示され、夫の祐信殿が善人たる法華經の行者であることから、女房も法華經の女人であり、即身成仏が疑いないと決定されている

「女人となる事は物に随つて物を随へる身なり」同 九八七頁

女人は夫に従っているように見えるが、実には従えている。自ら発心し率先して取り組む信行の在り方こそ大事であり、生活の中心をはっきりと自覚し実践できる婦人に。婦人が動けは皆が動く。その道理を実践した方こそさじき女房。手本としていこう。●「上宮は手の皮をはぐ」（開目抄）五七八頁）聖徳太子が手の皮をはぎ、血を採って梵網經の外題を書いたことや、樂法梵土が身の皮を紙とし、骨を筆とし、血を墨として一偈を書き留めようとしたといつもの。

聖人の行者「雪山童子は半偈のために身をなげ常啼菩薩は身を売り善財

童子は火に入り樂法梵土は皮をはぐ藥王菩薩は臂をやく不輕菩薩は杖木
かうむり師子尊者は頭をはねられ提婆菩薩は外道にころさる

樂法梵土や雪山童子は釈尊が過去世で修行していた時の姿

● 帷は一枚ではない

この功德は自分一人に止まるものではなく、どこにでも行き渡る風のよ
うに無辺に開き、世界を浄化していく